The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式への姿勢 ：桂離宮の影響に着目して
Author(s)	羽藤, 広輔
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 51-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式への姿勢
── 桂離宮の影響に着目して ──

羽　藤　広　輔

キーワード
白井晟一，雲伴居，桂離宮，付書院
Seiiti Sirai, Un-Pan-Kyo, Katsura-Rikyu, Tsuke-Shoin

１．はじめに
２．「雲伴居」概要
３．白井晟一の和風建築観と桂離宮観
４．「雲伴居素描」スケッチにみる「雲伴居」の構想過程
５．同時代の建築家の事例との比較
６．おわりに

１．はじめに

本稿は，建築家白井晟一（1905-1983）の遺作であり本人が使用する目的で計画された和風住宅「雲伴居」（1984）を取り上げ，桂離宮の影響[1]に着目して，その意匠的特徴と，その背景となった白井の建築観を考察するものである。

白井は，昭和期住宅史において和風を手がけた代表的建築家と捉えられており[2]，多数の住宅作品を遺しているが，中でも「雲伴居」は，書斎に床の間・付書院を備え，日本の伝統的様式[3]に近い構成が顕著に見られる特異な事例である。

他方，桂離宮は日本の近代建築家達にとって最も重要な日本の古典の一つであったことは言うまでもないが，「雲伴居」にも桂離宮の座敷の意匠に近い要素が見られる。本研究では，白井の桂離宮観を検証した上で，特に付書院の扱い方について，「雲伴居」計画における白井の古典に対する姿勢を明らかにする。その際，同時代の和風を手がけた建築家，すなわち，村野藤吾（1891-1984）と堀口捨己（1895-1984）の作品で，同じ様に桂離宮に影響を受けた事例との比較を行い[4]，その姿勢の相違を考察する。

先行研究についてであるが，白井に関する学術論文は学会誌に公表されたものがほとんどない。近年，白井晟一の業績を見直す展覧会が連続して開催され[5]，それに伴っていくつかの「雲伴居」に言及した批評が発表されたが，名称や計画の経緯に関する記述が見られるのみで，建築自体の構成に論及するものではない。

また，本研究が利用する資料についてであるが，「雲伴居」については，竣工当時の建築専

本稿は第55回大会（2013年７月20日，於：福井工業大学）での発表に基づく。

門誌の記事を中心とし[6]，白井の著作については，白井晟一全集別巻Ⅰ・Ⅱ（以下SZB Ⅰ，SZB Ⅱと表記）[7]に収録されたものと，他２つの対談記事[8]とする。その他，著者が「雲伴居」関係者に対し行ったインタビューについても資料に加える。

２．「雲伴居」概要

「雲伴居」は，白井が設計した自身のための書堂[9]である。計画概要は表１に示す。白井は1983年11月19日この現場で倒れ，22日に亡くなったのだが，「雲伴居」は遺された者の手により白井の言い遺した細密な指示に従って1984年の９月に完成したという[10]。建物内部は，図１の平面図に示す通り，大きく分けて２つの座敷から成り，東側に書斎が，西側に寝室が配されている。書斎に設けられた上段（写真２）は，白井自身が書を書くためのスペースである。書机と書院窓を備え，床の間が隣接していることから所謂書院造の付書院の形式に近いと言える。

写真１　「雲伴居」外観

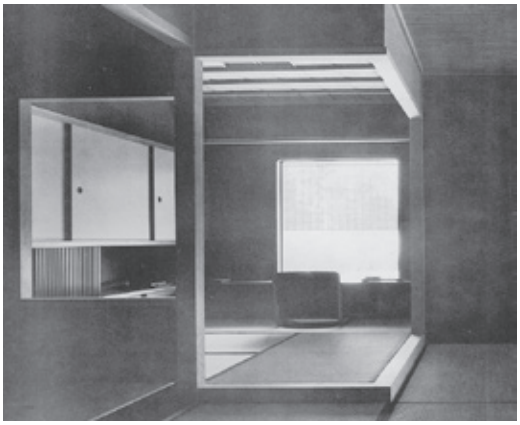

写真２　「雲伴居」書斎上段

表１　「雲伴居」計画概要

敷地	京都市右京区嵯峨	主要用途	書堂
設計	白井晟一	外部仕上げ	
基本設計	1982.10～1983.6	屋根	瓦一文字葺き（寄棟で緩やかな起り）
実施設計	1983.6～1983.8	外壁	ジョリパット吹き付け（曼殊院の壁に似せたという淡い紅殻色）
工事	1983.9～1984.9	書斎仕上げ	
現場担当	柿沼守利（白井晟一研究所所員）	床	畳
敷地面積	1,254.00㎡	壁	草色がかったジュラク
建築面積	190.67㎡	天井	上段と広間：杉中杢棹米松／下り天井部：蒲貼／床の間：桐柾目板棹杉材
延床面積	165.40㎡	上段の框	栗
主体構造	木造	作り付け書机の甲板	パリサンダー
規模	平屋	それ以外の木部	米松（ピーラー）
平面形状	桁行（東西方向）19,800mm、梁行（南北方向）9,240mmのほぼ矩形		

※新建築1985年2月号、建築文化1985年2月号より作成

図１　「雲伴居」平面図

異なっているのは，書机の下部が堀炬燵となっている点であり，嵯峨野の冷え込みを考慮してヒーターが組み込まれている[11]。

３．白井晟一の和風建築観と桂離宮観

３－１　白井晟一の和風建築観

対談「建築と書」(1980)[12] において，対談相手が「いまでも禅寺などに行くと，書院風の骨格のはっきりした，精神性のあるものがあるんでしょう」と問いかけたのに対し，白井は「書院」に対する考えを次のように語っている。

> もっと的確に言えば，書院の前身の健全な生活空間ということですね。書院になると，いくらかそこには禅宗とか，外国からきた思想の影響があります。その前身が精神性のあるものなんだ。しかし，書院建築はその精神をちゃんと持って花と咲いたものですから，ひとつのサンプルにしなきゃならんでしょうね。貧しさこそ誇りであるというようなところから出発して，官能を克服して，本当に人間が生きてゆく性根，理性，そういうところに根ざした空間を作らねば。

白井が書院の欠点として挙げている「禅宗とか，外国からきた思想の影響」とは，対談中，引用部分に至る直前で，「数寄屋」を「官能に媚びて情緒に目覚めさせてゆく」ようなものとして否定していることから，書院の，構造に即した建築構成の原理を離れ，装飾という官能に媚びた形式へ展開していった側面を指して述べていることがわかる。

また，白井は1982年の対談で「禅宗は宋文化の橋渡しはしているが，日本で民衆まで徹する直接的な文化を創ったとはいえないと思う」（SZB Ⅱ：274）と述べている。書院の発展の過程において，それが，一部の階層のみに享受することが許された文化であり，そこに「民衆」の存在が見当たらなかったという点について難色を示しているのである。

こういった考えのもと，めざすべきものとして，白井は「書院の前身」を挙げている。この「書院の前身」とは，「武家造」と呼ばれたような[13]，鎌倉時代における武家の住居に見られる形式を指していると考えられる。武家造は，北尾春道[14]が「書院造の発生は武家造を母体として禅院の風趣を邸宅化して起り」[15]というように，書院造の前身と考えられていた様式であり，さらに北尾は武家造を「生活に即した実際的必要から生じた邸宅」と評している。このように，白井の言う「書院の前身」なるものとは，鎌倉時代の武家の住居に見られるような，簡素で実用的なもの，そして，「民衆」の「生活」そのものに根ざした健全な空間を指すものと考えられる。

白井の数寄屋批判の考え方は，1952年『新建築』で発表された住宅作品「試作小住宅」の説明文でも見られる。冒頭で計画の経緯や，構法や材料について説明し，これに続けて次のように書いている。

> 都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず，殆んど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚樂色のリシン壁で，いわゆる近代數寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあっては，當然，充分な考慮を拂わなければならないインシュレイションや壁體内の通氣には甚だ冷淡である。この様式は花柳狹巷にはよろしい。しかし健全なるべき階級の住宅までこの様式を逐うのは問題である。（SZB Ⅰ：303）

当時流行していた近代数寄屋の様式が健全な民衆の住居にまで流布することを非難し，自身が用いた二重壁のシステムをそれと差別化して，立場を明確にしている。

その他，白井が和風建築について語った資料として対談「木のはなし」（1978, SZB Ⅱ：123）が挙げられる。ここでも白井は「試作小住宅」説明文と同じように，近代数寄屋に対する同様の批判を述べている。20年以上の年月を跨いで，ほぼ同じ内容が語られており，1950年代以降，和風建築に対し，白井が一貫して持ち続けた考えであることがわかる[16]。

３－２　白井晟一の桂離宮観

前節で述べたように，白井は一貫して数寄屋を否定しており，1980年の対談でも「僕は数

寄屋は廃しています」[17] とはっきり述べている。よって当然桂離宮も，白井の批判の対象となりうるだろうと考えられる。事実，1978年の対談で次のように述べている。

> 旧聚楽第移築の三渓園の諸建物，桂や修学院，京都御所などたくさんありますが，どちらにせよ特権者のための建物以外でないということは一様にわれわれの文化遺産といってもいろいろ考えさせられるものがあります。イデオロギーではなく造形のガイスト（精神）の問題です。（SZB Ⅱ：129）

ここでも前述の数寄屋批判と同様の主張を見て取ることができる。しかしながら一方で，川添登が「白井晟一は，桂離宮・修学院離宮を見学し，学ぶところが多かった」[18] というように，白井にとって桂離宮は良質な木造建築の手本であったことは否定できず，存在経緯は否定するものの，物的な実例としては肯定するという両義性が見てとれる。

さらに1983年のエッセーでは，次のように書いている。

> 「桂」の空間は語りつくされている。ここでわたしが新鮮を加えられるものではない。ただ，その卓絶にひそむ日本的感性の凝縮した構成の純粋さと自由。その追體験の厚薄こそ，これからの日本文化の質に深く關わらねばならぬことを重ねて銘記するにとどめよう。（SZB Ⅰ：264）

「日本的感性の凝縮した構成の純粋さ」とは，白井が以前から日本建築の特徴として肯定してきた木造架構の特徴[19] を指すものと考えられるが，「自由」というところに桂離宮における数寄屋的要素，すなわち装飾的要素をある程度認める態度が見られ，最晩年における態度の軟化が見てとれる。

４．「雲伴居素描」スケッチにみる「雲伴居」の構想過程

４－１　「雲伴居」書斎にみる桂離宮との近似性

「雲伴居」構想過程の考察において重要な資料となるのが『写真集「雲伴居」』（筑摩書房 1993）であり，「雲伴居素描」と題された白井本人が描いたスケッチが収録されている。この中には，フリーハンドで描かれた平面図，内部の展開図，内観パースのスケッチが含まれている。まず桂離宮との意匠的類似が見られる内観パースを描いたスケッチについて見ていこう。

図２のスケッチは，上段や床の間が描かれていることから，完成した書斎にあたる空間のスケッチであることがわかる。しかしながら，これを書斎の完成形と比較してみると，上段と床

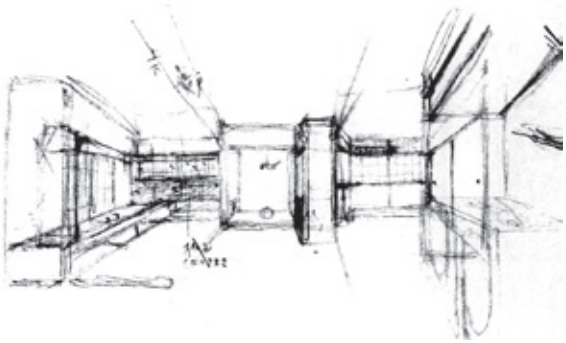

図２　「雲伴居」書斎スケッチ

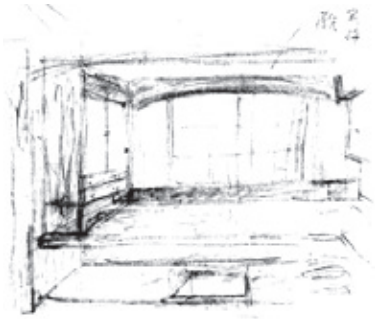

図３　「雲伴居」書斎上段スケッチ

図４　桂離宮新御殿の平面図

写真３　桂離宮新御殿一の間上段

写真４「雲伴居」木瓜形窓

の間の位置関係が反転していることがわかる。

この理由について，ひとつの仮説であるが，初期の計画段階において，白井は写真３・図４に示す桂離宮新御殿一の間の座敷構成を意識していたのではないかということが考えられる。木村二氏によると，白井は「雲伴居」計画期に数回にわたって桂離宮に足を運んでいたという[20]。

上段における付書院まわりを白井がどのように構想していたかについては，図３のスケッチが存在する。書院窓の上部に見られる円弧形の意匠からは，同様に桂離宮新御殿一の間上段の櫛形窓の印象を受ける。また，「雲伴居」書斎の北西部には，写真４に示す半分に割った木瓜形の吹抜窓が設けられている。これは「雲伴居素描」スケッチの当該箇所に一貫して見られることから，計画期間を通じて意図されていたと考えられる。桂離宮新御殿二の間床の間の木瓜形窓と近い意匠を示しており，一の間上段との配置関係も近い。さらに後述する図５のスケッチには「桂ダナ」という表記も見える。

よって，「雲伴居」書斎構想段階における桂離宮新御殿の意匠的影響は，充分指摘することができるであろう。

４－２　火床まわりの意匠について

桂離宮以外の古典との関連についても見ていこう。「雲伴居」書斎西面展開図を描いた図５のスケッチの火床まわりの観音開きの扉部分には，左右異なる意匠の扉が描かれ，右に「Ａ」，左に「Ｂ」と記号ふられ，その上方に「Ａ又ハＢ」と表記されている。さらに「Ａ」の扉から引出し線が引かれ，その先に「桂ダナ　参考　院Ⅱ167」という表記が見える。「桂ダナ」については，桂棚の写真７上部に示す部分の意匠を指しているのであろう。完成形（写真５）は，これに近い意匠となっている。また「院Ⅱ167」についてであるが，これは『書院Ⅱ』（創元社1969）[21] の167頁を指すものと見て間違いないであろう。この頁には三渓園臨春閣第一屋台子の間水屋（写真６）が掲載されており，「Ｂ」扉と近い意匠の扉が見られるほか，火床まわり全体の立面の意匠が非常に近いものとなっている。また，図５のスケッチの「院Ⅱ167」表記のすぐ下には，薄く「119曼」と読める表記が見える。前掲の『書院Ⅱ』の119頁を見てみると曼殊院黄昏の間違い棚の写真が掲載されており，先の「Ａ」扉に近い意匠の戸袋が見られる。

以上から白井の実際の設計の現場における古典の取り込み方が見てとれる。白井は桂離宮に限らず，様々な古典から気に入った意匠を抽出し，自身の設計に取り入れていたのである。1969年には磯崎新による白井論[22] を自ら肯定しつつ，「洋の東西とか故事来歴など超越して美をどこまでもとことんまで追求しているという伝統が，利休に限らずあるんですよ」（SZB Ⅱ：94）と述べ，また1978年には木造和風住宅の設計にあたり「『數寄屋建築聚成』とか『書院建築類聚』など離すことがないくらい没頭しました。」（SZB Ⅱ：124）と語っている。

写真５　「雲伴居」書斎火床

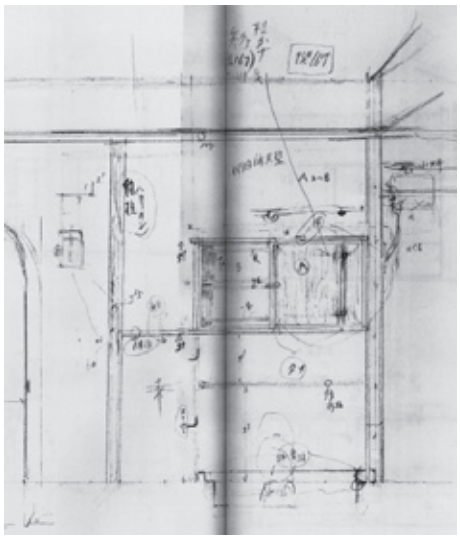

図５　「雲伴居」書斎西面詳細スケッチ

写真６　三渓園臨春閣第一屋台子の間水屋

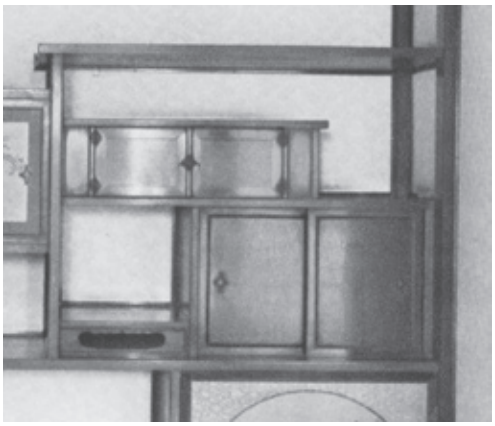

写真７　桂棚部分

５．同時代の建築家の事例との比較

５－１　堀口捨己の「八勝館八事店」について

白井と同時代の和風を手がけた代表的建築家の作品において，桂離宮が意識された事例を見てみよう。その際，「雲伴居」書斎において特徴的な場所であった付書院を含む上段のあり方についても注目する。該当する事例が見られた堀口捨己と村野藤吾の事例を見てみよう。

堀口については，写真８に示す「八勝館八事店」（1950）が挙げられる。堀口は外観について，「桂離宮のごとくになってきた」[23] と書いている。また，堀口の著書『桂離宮』における桂離宮新御殿一の間上段の間に対する説明について見てみよう。全体としては，材質や仕上げ等の物的事実の説明が多い。堀口の意図が感じられるのは，「附書院の窓形は，いずれ唐様の花頭窓からきているであろうが，その形を崩して既に日本らしい姿となっている。」[24] と櫛形窓に関心している点や，桂棚について「打ち見たところ珍らしい板を集めたことは直に見とれるが，そのために特に美しいとは思えない。」[25] として，素材の珍しさには価値を見出さない姿勢である。

続いて「八勝館八事店」についてであるが，「みゆきの間」に桂離宮新御殿一の間上段を想起させる付書院を含む座敷が見られる。藤岡洋保は，みゆきの間の構成の特徴について「全体に非常にダイナミックな空間構成を持つ和室で，「線」と「面」の構成という考え方でつくられていることがよくわかる。南側に張り出すことによって空間の奥行きを感じさせる，変化に富んだ床の構成や，広間南側の長押が床の途中にある床柱までつながっているあたりにそれが見られる。」[26] としている。

付書院について見ていこう。配置については，落掛と床框によって明確にくの字に広間に張り出す桂離宮新御殿一の間の例とは異なり，付書院が南側に張り出しており，座敷の形状は矩

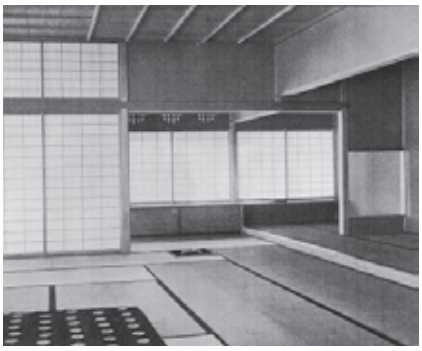

写真８　「八勝館八事店」みゆきの間

写真９　「三養荘」雄峰床の間

形に保たれている。床の間の上段部分がそのまま延長されて付書院のゆか部分を形成する一方，下り壁や柱，鴨居といった水平垂直の要素が，直角に互いに交差することによって，付書院の空間を隣接するスペースから区分している。また実際の使い勝手について，藤岡が「床脇南側の出っ張った部分は茶を点てる場所としても使えるようになっている。」[27] と言及している。

５－２　村野藤吾の「三養荘」について

村野については，写真９に示す「三養荘」（1989）が挙げられる。中村昌生によれば「村野先生は，三養荘の計画にあたり「桂離宮のように」という基本的な構想を抱かれていたという」[28] としている。続けて「桂のすべてが優れているとは思いませんね。あの時代の物で他にももっとよいところを持っている建物があるんじゃありませんか。」という村野の言葉を紹介し，さらに村野は，桂離宮の一番賞賛するところとして「やはり古書院の正面から舟着場へかけてのアプローチでしょうか，あそこは素晴らしい」と絶賛したという。

西和夫は，桂離宮の形態だけを論じることを批判し，「桂離宮の大きな特色は，それが洛外に設置された別荘だという点にある。教養に裏付けられた遊びの施設であり，宿泊施設であった。（中略）ここに後水尾院のような賓客を招いたから，賓客を接待するための施設でもあった」としている。村野はそうしたことを理解し，念頭に「総体としての桂離宮」があったとしている[29]。

次に付書院について見てみよう。「三養荘」の建築群の中に，桂離宮新御殿一の間上段に類する場所を探索してみると大広間「雄峰」上段が挙げられる。写真９からわかるように床の間内に設けられた上段には，付書院の櫛形の意匠等明らかな類似が見られる。しかしながら，配置については大いに異なっており，床の間の中にさらに入れ子状に，付書院を含む上段部を設けている。この場所は雑誌発表の際，花を飾った写真が掲載されており[30]，そのような使用を想定してデザインされたものと考えられる。写真キャプションには「残月床」とあり，残月風

と見ることもできる。残月床は，村野が一貫して取り組んできたテーマであり[31]，自邸の例をはじめ様々なアレンジが試みられた。そのような残月写しと桂離宮のモチーフが融合したものとも考えられよう。

５－３　二者との比較にみる「雲伴居」

桂離宮の影響が見られた堀口の「八勝館八事店」みゆきの間，村野の「三養荘」雄峰について，付書院を含む上段の構成に着目し，白井の「雲伴居」書斎と比較してみよう。

堀口の例では，「八勝館八事店」という建築自体が天皇の行幸を前提に計画されている点が注目されるほか，付書院まわりに茶を点てるという機能が付加され，茶室研究の第一人者たる堀口なりの解釈が垣間見える。しかし付書院は，実用目的の場所ではなく，床の間同様美的観照の場所以外のものではない。

村野の例では，施設全体を大きく「遊宴の舞台」と捉え，付書院を含む上段はその一部として，花等を飾る飾り棚としての役割を果たしている。付書院と床の間が一並びに観照の場所となっている点で堀口同様であり，Ｌ型に配置される伝統的座敷飾りと比較しても平板化している印象が否めない。

他方，白井についてであるが，付書院を書く場所と捉えており，この点に数寄屋批判とも重なる，白井の付書院批評が見て取れる。第３章で述べたように白井は，数寄屋を批判した上で，「書院の前身」なるものをめざすべきものとして挙げている。これは一部の人間だけが享受する，官能に媚びた装飾化した形式を否定し，民衆の生活の実用に即した空間をよしとするものである。この構図を，付書院についても考えてみると，「書院の前身」に相当する「出付机」という段階が指摘できる。なぜなら，付書院は，完成した書院造において装飾的な場所になったものの，その起源は書を読み，物を書く，生活の実用に即した机であったからである。その様子は『法然上人絵伝』に見ることができる。

桂離宮新御殿一の間上段付書院の使い勝手については，西和夫は「押板の下は，ここに坐って書き物などをする際に膝が入るようにつくられ，しかも外側の入側縁との間に入れた板をはずせるようにしてあって，夏に風を通すための工夫となっている。」[32] と解説している。すなわち桂離宮新御殿一の間上段付書院は，実用が考慮された場所であるという解釈が存在する。

以上から，白井は付書院を書くという行為の場所として解釈することによって，その装飾的要素を批判し，伝統的様式に対する批評的意匠を完成させたと考えられる。その際，桂離宮は新御殿一の間上段付書院における実用的側面において，白井を触発した可能性があると言えよう。

6．おわりに

白井の和風建築観の特徴は，一貫して数寄屋形式成立の社会状況を批判している点であり，一部の人間だけが享受する，官能に媚び，装飾化した形式を否定し，「書院の前身」なるもの，すなわち，民衆の生活に根ざした健全な空間をよしとするものであった。従って桂離宮についても当然，批判の対象となるのだが，見学して学ぶところが多かったという事実も伝えられており，造形の背景の社会状況は否定しながらも，良質な和風建築の物的手本としては参考にするという特徴を指摘することができる。

『写真集「雲伴居」』に収録された「雲伴居素描」スケッチからは，「雲伴居」書斎への桂離宮新御殿一の間の影響が読み取れ，他の古典についても自在に自身の意匠に取り込んでいる様子を見てとることができた。

さらに，桂離宮の影響が見られる堀口捨己や村野藤吾の事例と「雲伴居」の例を比較すると，付書院の現代的有用性の求め方において，特徴的な差異が見られ，二人の事例が，茶を点てる場所や花を飾る場所として計画されているのに対し，「雲伴居」では，書を書く場所として計画されていた。数寄屋を批判して「書院の前身」をよしとする白井自身の和風建築観と同調するように，付書院を，それが装飾的な要素となる以前の「書く」という行為の場所として，改めて捉え直し，伝統的様式に対する批評的意匠を完成させたのである。その際，桂離宮は数寄屋でありながら，付書院のあり方において肯定的な参考材料となった可能性がある。

以上の点で，「雲伴居」は白井の和風住宅における伝統的様式への姿勢を示す重要な作品として位置づけることができよう。

謝　辞

本研究は JSPS 科研費24652026の助成を受けたものです。ここに記して謝意を表します。

註

1　本稿では，「雲伴居」に見られる桂離宮との意匠的類似や白井晟一の設計意図とその桂離宮観との関連等を一括して「桂離宮の影響」と捉えている。

2　白井は，谷口吉郎，堀口捨己，村野藤吾，吉田五十八とともに昭和期住宅史において和風を手がけた代表的建築家と捉えられている。『新建築11月臨時増刊　昭和住宅史』新建築社，1976，p. 164や伊藤ていじ「白井晟一の数寄屋普請 ── 富山・呉羽の舎，秋田・昨雪軒 ──」『数寄屋聚成第15・16巻特輯号 現代数寄屋住宅聚』叢文社，1974，p. 158等による。

3　本稿で「伝統的様式」を，書院（造），数寄屋（造）といった日本の歴史的住宅様式の意味で用いている。また「数寄屋」という場合，様式としての数寄屋造の意味で用いており，近代数寄屋も含む。

4　比較対象として取り上げた２つの事例は，「雲伴居」とは用途や規模等異なる点も多いが，本稿では桂離宮の影響と付書院を含む上段のあり方を主要な論点として扱っている為，前者が設計者の認識として確実に認められ，かつ後者に類する空間を含んでいることに重点を置き，事例を選定した。なお，管見では他の４名の建築家（註２）の作品において，上記の条件に適合する事例は，他に見当たらない。

5　「SIRAI，いま　白井晟一の造形」展（会期：2010.7.5～7.30，会場：東京造形大学附属横山記念マンズー美術館），「建築家　白井晟一　精神と空間」展（会期：2010.9.11～11.3，会場：群馬県立近代美術館／会期：2011.1.8～3.27，会場：パナソニック電工汐留ミュージアム／会期：2011.5.23～8.11，会場：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）

6　『新建築　1985年２月号』新建築社，pp. 157-172，p. 253，『建築文化　1985年２月号』彰国社，pp. 33-46，『日経アーキテクチュア　1985年１月28日号』日経ＢＰ社，pp. 178-183，『白井晟一研究Ⅴ』南洋堂出版，1984，pp. 16-28，『写真集「雲伴居」』筑摩書房，1993が該当する。なお「雲伴居」は現在，所有者の都合で変更が加えられている。

7　白井晟一研究所『白井晟一全集　別巻Ⅰ　白井晟一の眼Ⅰ』同朋舎出版，1988（SZB Ⅰ），白井晟一研究所『白井晟一全集　別巻Ⅱ　白井晟一の眼Ⅱ』同朋舎出版，1988（SZB Ⅱ）

8　白井晟一・草野心平・栗田勇　対談「詩と建築の原質」『現代建築家全集９・白井晟一』三一書房，1970，pp. 133-199，白井晟一・栗田勇　対談「建築と書」『くりま』創刊号，文芸春秋，1980，pp. 188-197

9　「書堂」という表現は，白井昱磨「虚白庵にて ── 父のこと　建築のこと　雲伴居のこと ──」『新建築1985年２月号』，p. 172等の白井昱磨の文章で使われたのがきっかけとなり定着した。白井本人が使った表現であるかどうかは定かではない。白井は建築家でありながら「この十數年，一日の半分を習書でうずめることができたのは大きな恵みであった」（SZB Ⅰ：197）と語っているように，1960年代中頃からその生を閉じる1983年までの間，書を書くことに大きな時間を割いてきた。1970年以降には，白井の書の展覧会が行われ，書の作品集（『顧之居書帖』）も刊行されるようになり，白井の書が社会に広く知られるようになった。いずれにせよ，「雲伴居」は白井晟一がそこで書三昧の生活を送るために造った住居であることに間違いは無い。

10　前掲，白井昱磨，1985，p. 172

11　柿沼守利氏の証言。2003.9.12～17筆者とのインタビュー。「ここに座している時間が長いので冬など嵯峨野の冷え込みを考慮して足下にヒーターを組み込んだのです。飽くまで形式的な書院に利便性の上からの椅子機能の採用に加え現代のテクノロジーを加味したのです。」

12　前掲，白井晟一・栗田勇，1980，p. 193

13　日本建築史研究の分野では，このような様式を定義する必要がないのではないかという議論がなされており（太田博太郎『書院造』東京大学出版会，1966，堀口捨巳『書院造りと数寄屋造りの研究』鹿島出版会，1978），このような状況を踏まえて，白井が「書院の前身」という表現を使用したのではないかとも考えられる。

14　白井は北尾の著作を勉強していた。これは，著者が2003.9.19に行ったインタビューにおいて白井昱磨氏が証言した。

15　北尾春道『書院建築詳細図譜』彰国社，1956，p. 3

16　白井が否定する「数寄屋」とは，本文中で「近代数寄屋」と記述している通り，主として白井と同時代の建築家が展開した数寄屋を指すものと考えられるが，３－２で引用している白井の発言を踏まえると，その批判の対象は近世の遺構にも及ぶものと考えられる。

17　前掲，白井晟一・栗田勇，1980，p. 193

18　川添登「白堊の山荘」『白井晟一　建築とその世界』世界文化社，1978，p. 74

19「日本の優れた遺構は例外なく，構造そのものに仕上つた建物の美の性格を約束してゐるのであります。このことは勿論，室内の構成に於ても同様でありまして，美しい空間をつくつてゐる用材の大さ，窓や天井の高さ，比例などがみんな構造そのものに關係してゐるのであつて「装飾」による附け加への効果をまつまでもないのであります。」（SZB Ⅰ：5）

20　著者が2004.1.7に行ったインタビュー。木村氏は材木店の店主として「雲伴居」計画に関わっており，「雲伴居」計画期においてしばしば白井と行動をともにしていた。「白井は，雲伴居計画の時期，桂離宮へは何度も行ったらしい。そのほか曼殊院，石水院，にも行った。」

21　この本を白井は「雲伴居」計画期に自身の傍に置いていた。「著者が慥か藤岡通夫（前東京工大教授）の『書院』（創元社刊）上下２巻を傍に置いていました」前掲，柿沼守利，2003による。

22　磯崎新「親和銀行をみて　凍結した時間のさなかに裸形の観念とむかい合いながら一瞬の選択に全存在を賭けることによって組立てられた〈晟一好み〉の成立と現代建築のなかでのマニエリスト的発想の意味」『新建築1968年２月号』新建築社

23　堀口捨己『堀口捨己著作集　堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島出版会，1978，p. 119

24　堀口捨己『建築論叢』鹿島出版会，1978，p. 483

25　同上 p. 484

26　藤岡洋保『表現者・堀口捨己 ── 総合芸術の探求 ──』中央公論美術出版，2009，p. 178

27　同上 p. 180

28　中村昌生「「きれいさび」の意匠」『三養荘』同朋舎出版，1991，p. 140

29「桂離宮の大きな特色は，それが洛外に設置された別荘だという点にある。教養に裏付けられた遊びの施設であり，宿泊施設であった。御殿群は宿泊用のものである。ここに後水尾院のような賓客を招いたから，賓客を接待するための施設でもあった。庭に散りばめられた茶屋も，その目的のためにある。庭に船を浮かべ，船で料理や酒を味わいつつ漢詩や和歌を作って楽しむ。茶屋でもやはり，茶事を中心に四季折々に遊ぶ。御殿，茶屋，そして庭，その総体が遊宴の舞台となるべくデザインされている。これが桂離宮である。村野はこの点を十分に知っていただろう。」西和夫「村野藤吾と桂離宮」『村野藤吾の造形意匠　第１巻　伝統のかたち』京都書院，1994，p. 13

30　『新建築1989年５月号』新建築社，p. 295

31　村野藤吾は，中山悦治邸（1934），自邸（1942），今橋なだ万（1961）等，多くの計画において残月写

しの床の間を構想し，様々に本歌をアレンジしたデザインを多数生み出した。長谷川堯「残月と洞の床をめぐる思惟　村野藤吾による床の間のデザイン考」『和風建築シリーズ　床の間』建築資料研究社，1998，pp. 57-70を参考にした。

32　西和夫「解説」『京都の御所と離宮 ── ③　桂離宮』朝日新聞出版，2010，p. 95

図版出典

図１～３・５，写真１・４・５：白井晟一研究所『写真集「雲伴居」』筑摩書房，1993／写真２：『新建築1985年２月号』新建築社／写真３・６・７，図４：藤岡通夫・恒成一訓『書院Ⅱ』創元社，1969／写真８：『堀口捨己著作集　堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島出版会，1978／写真９：『新建築1989年５月号』新建築社